

蜘蛛の糸

芥川

龍之介

ある日の事でございます。御釈迦様は極楽の蓮池のふちを、独りでぶらぶら御歩きになつていらつしゃいました。池の中に咲いている蓮の花は、みんな玉のようによつて、そのまん中にある金色の蕊からは、何とも云えない好い匂が、絶間なくあたりへ溢れて居ります。極楽は丁度朝なのでございましょう。

やがて御釈迦様はその池のふちに御佇みになつて、水の面を蔽つている蓮の葉の間から、ふと下の容子を御覧になりました。この極楽の蓮池の下は、丁度地獄の底に当つて居りますから、水晶のような水を透き徹して、三途の河や針の山の景色が、丁度覗き眼鏡を見るように、はつきりと見えるのでございます。

するとその地獄の底に、健陀多と云う男が一人、ほかの罪人と一しょに蠢いている姿が、御眼に止まりました。この健陀多と云う男は、人を殺したり家に火をつけたり、いろいろ悪事を働いた大泥坊でございますが、それでもたつた一つ、善い事を致した覚えがございます。と申しますのは、ある時この男が深い林の中を通りますと、小さな蜘蛛が一匹、路ばたを這つて行くのが見えました。そこで健陀多は早速足を擧げて、

踏み殺そうと致しましたが、「いや、いや、これも小さいながら、命のあるものに違いない。その命を無暗にとると云う事は、いくら何でも可哀そ^{うだ}」と、こう急に思
い返して、とうとうその蜘蛛を殺さずに助けてやつたからでございます。

御釈迦様は地獄の容子を御覽になりながら、この健陀多には蜘蛛を助けた事がある
のを御思い出しになりました。そうしてそれだけの善い事をした報には、出来るなら、
この男を地獄から救い出してやろうと御考えになりました。幸い、側を見ますと、翡翠
の^{すい}ような色をした蓮の葉の上に、極楽の蜘蛛が一匹、美しい銀色の糸をかけて居り
ます。御釈迦様はその蜘蛛の糸をそつと御手に御取りになつて、玉の^{じゅはす}ような白蓮の間
から、遙か下にある地獄の底へ、まっすぐにそれを御下おろしなさいました。

二

こちらは地獄の底の血の池で、ほかの罪人と一しょに、浮いたり沈んだりしていた
健陀多かんだたでございます。何しろどちらを見ても、まつ暗で、たまにそのくら暗からぼん
やり浮き上つているものがあると思いますと、それは恐しい針の山の針が光るのでござ
いますから、その心細さと云つたらございません。その上あたりは墓の中のように

しんと静まり返つて、たまに聞えるものと云つては、ただ罪人がつく微な嘆息ばかりでございます。これはここへ落ちて来るほどの人間は、もうさまざまな地獄の責苦に疲れはてて、泣声を出す力さえなくなつてゐるのでございましょう。ですからさすが大泥坊の健陀多も、やはり血の池の血に咽びながら、まるで死にかかつた蛙のように、ただもがいてばかり居りました。

ところがある時の事でございます。何気なく※健陀多が頭を擧げて、血の池の空を眺めますと、そのひつそりとした暗の中を、遠い遠い天上から、銀色の蜘蛛の糸が、まるで人目にかかるのを恐れるように、一すじ細く光りながら、するすると自分の上へ垂れて参るのではございませんか。健陀多はこれを見ると、思わず手を拍つて喜びました。この糸に縋りついて、どこまでものぼつて行けば、きっと地獄からぬけ出せるのに相違ございません。いや、うまく行くと、極楽へはいる事さえも出来ましょう。そうすれば、もう針の山へ追い上げられる事もなくなれば、血の池に沈められる事もある筈はございません。

こう思いましたから健陀多は、早速その蜘蛛の糸を両手でしつかりとつかみながら、一生懸命に上へ上へとたぐりのぼり始めました。元より大泥坊の事でございますから、

こう云う事には昔から、慣れ切つてしているのでございます。

しかし地獄と極楽との間は、何万里となくござりますから、いくら焦あせつて見た所で、容易に上へは出られません。ややしばらくのぼる中に、とうとう健陀多もくたびれて、もう一たぐりも上の方へはのぼれなくなつてしましました。そこで仕方がございませんから、まず一休み休むつもりで、糸の中途にぶら下りながら、遙かに目の下を見下しました。

すると、一生懸命にのぼつた甲斐があつて、さつきまで自分がいた血の池は、今ではもう暗の底にいつの間にかかくれて居ります。それからあのほんやり光つている恐しい針の山も、足の下になつてしましました。この分でのぼつて行けば、地獄からぬけ出すのも、存外わけがないかも知れません。健陀多は両手を蜘蛛の糸にからみながら、ここへ来てから何年にも出した事のない声で、「しめた。しめた」と笑いました。ところがふと気がつきますと、蜘蛛の糸の方には、数限かずかぎりもない罪人たちが、自分のぼつた後をつけて、まるで蟻ありの行列のように、やはり上へ上へ一心によじのぼつて来るではございませんか。健陀多はこれを見ると、驚いたのと恐しいのとで、しばらくはただ、莫迦ぼかのように大きな口を開いたまま、眼ばかり動かして居りました。自

分一人でさえ断れそうな、この細い蜘蛛の糸が、どうしてあれだけの人数の重みに堪える事が出来ましよう。もし万一途中で断れたと致しましたら、折角ここへまでのぼつて来たこの肝腎な自分でも、元の地獄へ逆落しに落ちてしまわなければなりません。そんな事があつたら、大変でございます。が、そう云う中にも、罪人たちは何百となく何千となく、まつ暗な血の池の底から、うようよと這い上つて、細く光っている蜘蛛の糸を、一列になりながら、せつせとのぼつて参ります。今の中にどうかしなければ、糸はまん中から二つに断れて、落ちてしまうのに違ひありません。

そこで健陀多は大きな声を出して、「こら、罪人ども。この蜘蛛の糸は己のものだぞ。お前たちは一体誰に尋いて、のぼつて來た。下りろ。下りろ」と喚きました。

その途端でござります。今まで何ともなかつた蜘蛛の糸が、急に健陀多のぶら下つてゐる所から、ぷつりと音を立てて断れました。ですから健陀多もたまりません。あつと云う間もなく風を切つて、独樂のようにくるくるまわりながら、見る見る中に暗の底へ、まっさかさまに落ちてしまいました。

後にはただ極楽の蜘蛛の糸が、きらきらと細く光りながら、月も星もない空の中途に、短く垂れているばかりでございます。

三

御釈迦様は極楽の蓮池はすいけのふちに立つて、この一部始終しゆうをじつと見ていらつしゃいま
したが、やがて健陀多かんだが血の池の底へ石のように沈んでしまいますと、悲しそうな御
顔をなさりながら、またぶらぶら御歩きになり始めました。自分ばかり地獄からぬけ
出そうとする、健陀多の無慈悲な心が、そうしてその心相当な罰をうけて、元の地獄
へ落ちてしまつたのが、御釈迦様の御目から見ると、浅間しく思召されたのでござい
ましよう。

しかし極楽の蓮池の蓮は、少しもそんな事には頓着とんじやく致しません。その玉のような
白い花は、御釈迦様の御足おみあしのまわりに、ゆらゆら萼うてなを動かして、そのまん中にある金
色の蕊すいからは、何とも云えない好い匂が、絶間なくあたりへ溢あふれて居ります。極楽も
もう午に近くなつたのでございましよう。

(大正七年四月十六日)